

兵庫県現代詩協会 会報45号

2019年7月1日発行 時里二郎

■時里二郎新会長挨拶

たかとう匡子さんのあとを引き継ぎました。兵庫県現代詩協会は1997年に設立されましたが、言うまでもなく、1995年の阪神・淡路大震災という未曾有の体験を受けての協会発足でした。震災の惨禍を越えて、兵庫県に在住する詩人たちが結集し、いち早く震災詩集のアンソロジーを刊行したことがきっかけで生れたことは、この協会の原点として忘れてはならないことです。

たかとう会長の六年間で、協会の活動がしっかりと根付き、会員の方々のご理解とご協力を受けて、充実した活動を続けています。今回の総会において、協会の会則が一部改定されました。今までは、

「兵庫県に在住、または関係のある詩人の親睦交流を図り」とあるところを、「兵庫県に關係する詩人や詩を愛好する者の親睦交流を図り」と改めました。詩を書く人ばかりでなく、詩を書いていない



けれども、現代詩に興味を持って読んでいるといった人たちにも門戸を広げて、現代詩の普及発展に資する活動ができればというのが改訂の趣旨です。今年度も、「詩のフェスタひょうご」、「ポエム&アートコレクション」、読書会や文学紀行などを行います。会員の方々の参加をお願いします。他にも協会のホームページの充実や会報の発行、名簿の作成など、会員相互の情報交換や交流を手助けするうえでも、協会がお役に立てたらと思っています。今後ともよろしく願います。

■第二十三回定期総会報告

第23回兵庫県現代詩協会総会が5月6日(月・祝)13時30分より兵庫県私学会館101号室で開催された。時里二郎氏開会挨拶に引き続き司会の神尾和寿から当日出席会員39名委任状54通で計93名と報告があり、会員数の3分の1の数が満たされていることを確認して総会は成立。議長選出が行われ、玉井洋子会員を選出。新役員承認が行われた後、議事を提出し2018年度活動報告・決算報告・会計監査報告をそれぞれ、事務局神田さよ・会計玉川侑香・会計監査梅村光明が報告した。次いで2019年度活動計画案・2019年度予算案をそれぞれ新事務局山本真弓・会計玉川侑香が述べた。最後に規約改正を時里二郎新会長から提案され異議なしで承認された。

■交流会告知 詩で開こう こころと未来を

関西詩人協会&兵庫県現代詩協会のコラボレーション

日時 8月17日(土曜日)13時30分~17時(詩集・詩誌持ち込みの方は13時集合)

場所 西宮市民会館 1階大会議室 〒662-0918 西宮市六湛寺町10-11 TEL 0798-33-3111

この交流会で関西詩人協会との親睦を深めたいと思います。

★参加者の詩集・同人誌・個人詩誌の紹介・販売

★自作詩朗読 協会から有志

★ロックンローバーの人形劇(福永祥子とその仲間たち) ★ピアノ演奏 松原さおり(詩誌『風鐸』同人)
詩集発行していない方、同人誌に所属していない方もどうぞ奮ってご参加ください。

チラシ記載以外の詩誌に所属の方は詩誌をお持ちくださりご参加ください。

懇親会 17時~ 於:西宮職員会館1F「くすのき」 会費3,000円(フリードリンク)

詳しくは会報に同封のチラシをご覧ください。

参加申し込みは同封のハガキに切手を貼り、7月31日(水)までに投函してください。

◇同人誌参加の方は主宰者に既に連絡済ですが、同封のハガキもお出しください

交流会担当 神田さよ 〒663-8006 西宮市段上町6-14-4 TEL 0798-53-0686

2019年度新役員

会長 時里二郎

副会長 神田さよ

事務局長 山本眞弓

会計 玉川侑香

常任理事 尾崎美紀・大西隆志・大橋愛由等・和比古・

神尾和寿・北岡武司・北野和博・丸田礼子・

理事 季村敏夫

監事 梅村光明・渡辺信雄

顧問 たかとう匡子

2019年度活動計画

・総会

・ふれあいの祭典「詩のフェスタひょうご」

・ポエム&アートコレクション

・読書会

・文学紀行

・関西詩人協会との交流会

・会報発行 年二回 7月、12月

・名簿発行

・ホームページの活用

兵庫県現代詩協会会則の一部規約改正

第1章第1条 「この会は兵庫県に關係する詩人や詩を愛好する者の親睦交流を図り、現代詩の普及発展のための相互協力や情報活動が円滑に行われることを目的とする。」

第2章会員 第5条 「この会の会員は兵庫県に關係する詩人や詩を愛好する者とする。」

《第二部》は司会北野和博で講演に移り演題「詩と古代」について田中荘介会員が語り、現代詩の失ったものは何かと問いかけ意義深い話を伺う。

《第三部》新入会員の自作詩朗読。高木敏克・藤本紘士・吉本弘子・田伏裕子・田村周平・張華・法橋太郎・辻岡真紀子

閉会挨拶を副会長神田さよが述べ、16時30分に終了。

総会出席者39名 青木佐知子・阿部由子・安西佐有里・岩崎英世・梅村光明・江口節・大西隆志・大橋愛由等・尾崎美紀・和比古・神尾和寿・香山雅代・神田さよ・北岡武司・北野和博・季村敏夫・関はるみ・高木敏克・田中信爾・田中宗介・田伏裕子・玉井洋子・玉川侑香・田村周平・張華・辻岡真紀子・時里二郎・永井ますみ・中島康夫・法橋太郎・牧田榮子・松下玲子・丸田礼子・水こし町子・にしもとめぐみ・森田美千代・山下照代・山本眞弓・吉本弘子。

《懇親会》出席者 23名 (報告:山本眞弓)

総会第二部講演「詩と古代」田中荘介氏

新天皇即位と改元による十連休には、格差が見え隠れし、マスコミのあたりは、自分の子ども時代(戦時)にもあつた流れと同じようだ。熱しやすく群れやすい国民性である。「令和」が国書から採用されたと固執するのは、国粋主義に等しい。日本文化は、元来、渡来したものを取り込んできた雑種文化であり、日本独自であるのは、大和ことばのみである。日本の文化には、大きな変革が二度あつた。一つ目は弥生期、漢字の伝来である。二つ目は明治維新の欧化政策である。

五・六世紀は、漢字の導入と習得に努力した。六・七世紀は、中国から導入した合理主義によつて元来の呪術的信仰が押され、風土記などに見られるアニミズムの神が追いやられて行く。日本古来と思われている神社も、中国の流れを汲むものであり、中国由来の律令制や官僚組織が整えられて、天皇制を支えていくのである。

こうして歴史を学ぶことは、世の常識の偏りを知ることもあるのだが、津田左右吉は『古事記』『日本書紀』を資料批判の観点から研究し、戦前は不敬罪に問われた。

斎藤美奈子著『私の同時代小説』(岩波新書)は、1960年代以降の小説を解説し、小説は段々読みやすく軽

くなっている、と述べる。また、堀田善衛著『ミッシェル城館の人』は、16世紀フランスの思想家モンテーニュの人と時代を書いたもの。同じく堀田の『方丈記私記』『定家明月記私抄』なども合わせ読み、人間はどこまで愚かだらしのないのか、と思う。

見渡せば、芸術も含め文明は、栄光から衰退へ向かっている、と私は考える。歴史的に見て、現在のように言葉が軽くなった時代はないのではないか。いまや、詩は、すでに使い尽くされた器ではないかと。

古来、言葉は、音声によつて口から出て来るものと考えられていた。古代人にとつて、言うと言わないは全く別物である。播磨風土記にある「夢野の鹿」の話や他にも、夢を信じて黙っている者と夢を信じないでしゃべる者とは、その後の運命が分かれることを示す。言葉の重さが、現代とは格段に違うのである。現代では、言葉は神のものから人のものになった。記紀歌謡や萬葉集以前の「語り」が持っていた原始エネルギーが、文字化記録化される中で失われていったのである。その一つは、音声・音律・韻律である。耳という皮膚感覚で受け止めていたものが、眼を通してイメージを再現させるものに変化した。もう一つは、定型や文語の持つことばのしなやかさである。言葉は無化し、裸になって、面白いものがなくなった。これら、失われたものがいかに多いことか。現代詩は、何が失われたのかも分からず、失ったことすら忘れたようである。

朗読においても、現代は音韻が単純化しており、古代に朗読されたものとは異なる。たとえば、「はひふへほ」は、古代では「ふあひうふえふお」であった。萬葉集から古代語の発音で朗読する。「春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ」(巻第十九一四一三九 大伴家持)

最後に、宮沢賢治「原体剣舞連」を朗読する。ここにはまだ、失われた原始エネルギーが残っている。

以上が要約である。最後の2編は、重厚な声の朗読であ

った。その後、次の質疑応答に、今後の課題が示唆された。
 A質問V今ひとたび言葉を振り返ることができるか？
 その方法はあるか？A答えV言葉は返ってこない。記紀歌謡や古典を学び直して、一人ひとりがやり直すしかないのではないかと。まずは、現在の危機意識を感じてほしい。
 (報告：江口節)

田中荘介講師経歴：1936年(二・二六事件の年)神戸市生。3歳、阪神大水害。九歳、空襲を受け、生家消失。その後敗戦。神戸大学文学部国文科修了。女子高に就職。1996年から神戸常盤短期大学に移り、教養科教授、詩の授業などを担当。2009年、定年退職。その後、明石市高齢者大学校で毎月講義、現在に至る。著書「夢の鹿」「播磨国風土記とところどころ」「田中荘介自選詩集」など10冊。「古風土記」「日本霊異記」など研究。世代として、安水俊和、多田智満子、伊勢田史郎、君本昌久、福井久子さんらより数余年余下。戦後の神戸の文学の空気を知る生き残り。かつての「たうろす」同人。(レジエメより)

■『ひょうご現代詩集2018』

発行・兵庫県現代詩協会Vが刊行。通巻14号、A5判並製本、本文244頁、定価2000円(本体価格)。カバーと飾り扉には和比古さんに絵を提供していただきました。詩稿を寄せていただいたのは、113名の会員のみなさんです。2年に1回発行のアンソロジー集として、会員のみなさんの力作が掲載されています。

同詩集についての問い合わせ、購入に関しては、兵庫県現代詩協会事務局まで連絡してください。(報告：大橋愛由等)



■ふれあいの祭典
 「詩のフェスタひょうご」告知
 ～詩の森に出かけよう～

主催…ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご実行委員会
 兵庫県現代詩協会・兵庫県公益財団法人兵庫県芸術文化協会
 日時…10月6日(土) 13時30分～16時30分
 場所…ラッセホール リリー
 (神戸市中央区中山手通4-100-8)

第一部 講演会・池井昌樹氏 テーマ「詩と私」
 第二部 自作詩朗読会 応募をお待ちしています。
 申込は9月15日まで(詳細は案内チラシを8月配布)
 連絡先・山本真弓 TEL 078-241-3086 (FAX)

池井昌樹氏プロフィール 1953年生。13歳の初夏の夜、詩のようなものを初めて生み落とし、以来、山本太郎選により進学雑誌投稿欄で次々と入選。1967年文部省旺文社主催全国学芸コンクールで「雨の日のたたみ」が特選一席。1977年第一詩集『理科系の路地まで』(山本太郎序・谷内六郎画)1999年『晴夜』(藤村記念歴史賞・芸術選奨文部科学大臣新人賞)1999年『月下の一群』(現代詩花椿賞)2006年『童子』(詩歌文学賞)2008年『眠れる旅人』(三好達治賞)2012年『明星』(現代詩人賞)など、最新刊『遺品』まで単行詩集19冊。選詩集として『現代詩文庫池井昌樹詩集』、『池井昌樹詩集(ハルキ文庫)』その他に植田正治の写真とコラボレーションした写真詩集『手から、手へ』(集英社)がある。現在法政大学教授、粕谷栄市との手書き手作り詩誌「森羅」同人。

■第十六回読書会の予定
 詩のフェスタに向けて、講師・池井昌樹氏の詩についての読書会を7月27日(土)13時～15時、私学会館301号で開催。チャーターは田村周平氏。読書会への出席については、同封の葉書で参加を申し込んで下さい。締切は7月20日(土)まで。(報告：丸田礼子)

■第十五回読書会報告
 藤富保男 アバンギャルド・エッセン

チャーター 坂東里美
 2018年12月1日 神戸市教育会館
 師走とは思えぬ暖かい日、詩の言葉の妙を学んだ。2017年9月に89歳で亡くなった藤富保男の作品を20年近く親交のあった坂東里美氏が同じ詩人の目で分析された。

冒頭で、日本の前衛詩人として70年近く詩の実験を繰り返して、その可能性を追求した藤富保男の詩はユーモア溢れる詩ですから、今日は大いに笑ってよい読書会です、と話された。藤富は、1928年東京生まれ、現東京外国語大学モンゴル語学科卒。公立中学校教師、大学講師であったが、東京オリンピックのサッカー役員(サッカーの名手だった)でもあり多才な人物であった。23歳で第一詩集『コルクの皿』を刊行した頃からE・パウロ、その弟子で当時進駐軍として来日していたM・レックと知り合い、カミングズの翻訳詩集を出版。世界の詩へと目を向けることになる。国内では、戦前からモダニズム詩を牽引し戦後も活躍していた北園克衛、北川冬彦、西脇順三郎らと詩活動を続けた。藤富は、ユニークな良い意味での奇人変人、大変魅力的な奇才で、若い詩人たちがいつも彼の側に集まって来ていた。藤富保男氏の詩活動は大きく分けて、詩・視覚詩・カミングズやサティの翻訳の三つであるが、その他にもプライベートプレス「あざみ書房」の社

主、音楽と朗読のコンサート「詩を奏でる」の公演など多彩な活動をしていた。

藤富保男の詩についてのキーワードとしてシュルレアリスムとイマジズムの2つを挙げられた。藤富の詩はシュルレアリスムの絵を文字を使って表現しようとするものだった。それを説明ではなく詩として定着させるためイマジズムの手法を使った。イマジズムとは、言葉によって絵画的イメージを読み手の眼前に映像として浮かび上がらせる、想像させようとする詩である。藤富の詩の特徴としては、明確に表現するために異常な比喩を用いたり、地口の多用や、文法を破壊してわざと辻褃の合わない表現を用いたりした。常套句を嫌悪し、新しい発想を持たない詩に対しては手厳しい詩人であった。しかし、その発想の基盤は、日常体験の中から得られたものでなくてはならないという考え方で、自分の中を通過した体験を想像力で変形させ、最初の姿がわからなくなるくらい変形の後、浮かび上がってくる「物凄い現実」を記述するのが彼の詩であるとのことだった。

藤富の代表的な作品を3つ挙げて具体的に詳しい分析と解説がなされた。「仕方が泣く頃」では、秋風の吹く男と女の極彩色でセンチメンタルな組曲的詩であるが、地口を多用し、言葉をずらしながらコミカルで切なく、この言語センスは天才的である。「六」は、六時に女と待ち合わせをしている男が待ちぼうけを食らっている状況であるが、話しが少しずつずらされて、一人の女が六時という時間になり、六時の待ち合わせの場所になる。六時が擬人化されて最後には焦燥感だけが漂う詩となっている。「没落の象徴」は、作品の中に隠し文字が埋め込まれたアクロステイック（折り句）の詩になっている。単語を分解して表記しているところは、スローモーションのコマ送りの効果を狙っている猫退治のユーモア溢れる詩。3作品とも詳しい解説があり、難解と思っていた藤富保男の詩が解きほぐされて理解が進んだ。

最後にCDで藤富の詩「狂詩曲・鈴木清」の朗読を聴く。新聞記事で「鈴木」という姓が多いと知り発想。想像力の膨らまし方は凄い。18分程の長い作品だが、藤富の声を聴くことができ、より身近な詩人に思えた。

質疑応答では、情緒をどのように考えていたのか、最後まで前衛だったのか、時代性との関連はどうだったのか、短い詩から長い詩に移行したのはどうしてなのか等、多くの質問が出て、2時間の予定はあっという間に過ぎた。今まで難解と思っていた藤富保男の詩がストンと身体の中を通り抜けて落ちる感が出て、固まった脳も少しは快感を共有した。

最後に私事だが、藤富保男氏は几帳面な方で、私の詩に對しても度々感想を下された。一昨年の6月24日付の手紙が最後で、7月5日入院、体調最悪の時であったと後で知り恐縮するばかりだ。今回記録係を担当して藤富氏への想いが再び蘇った。（報告：関はるみ）

■第8回

ポエム&アートコレクション展報告

◇今年度も1月17日から22日まで、会員の詩人が綴った詩とその詩に寄せたアート作品（絵画、書、オブジェ等）を組み合わせた展覧会が神戸文学館で開催された。

開催期間は6日間と短かったが、8回目になる展覧会には、会期中158名の来館者があり、盛況だった。

出品者数 22名

出品者名 阿部由子 大西隆志 大橋愛由等 和比古
香山雅代 佐野博美 高木敏克 高谷和幸 玉井洋子
永井ますみ 中島友子 中堂けいこ 西海ゆう子 坂東
里美 福永祥子 増田まさみ 松下玲子 丸田礼子 水
こし町子 望月逸子 山下輝代 山本真弓



◇兵庫・詩の現在展 今年度事務局に届いた会員の詩集・詩誌が展示された。

◇特別イベント「兵庫・神戸を生きた詩人を語る VOL.6」

平成31年1月19日14時・15時半 神戸文学館

演者：たかとう匡子

演題：杉山平一、方法意識の強い抒情詩人〜気骨ある

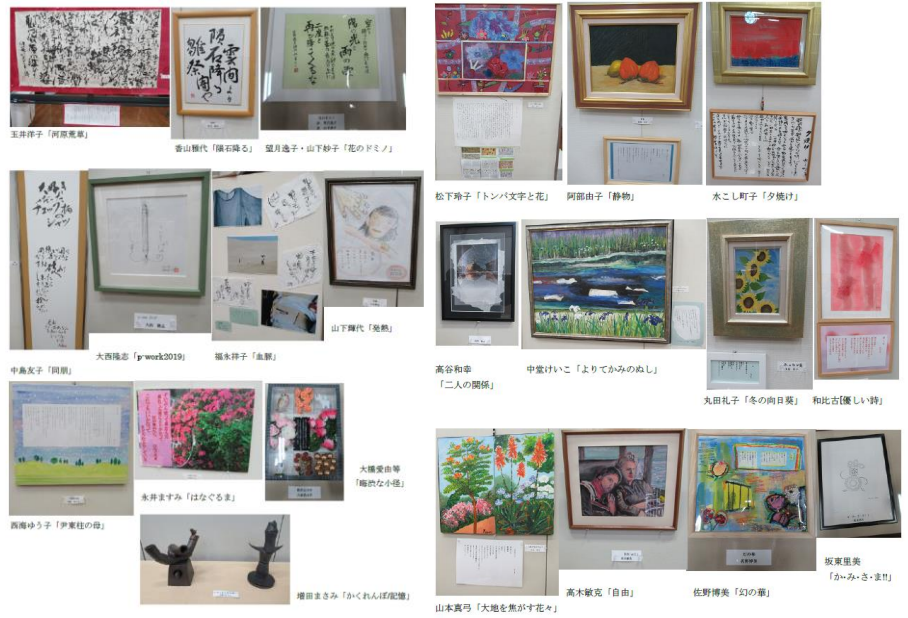
「四季」派の最後の詩人

講演要旨 展覧会の特別イベントとして、兵庫県現代詩協会会長のたかとう匡子氏による講演会を行った。この講演は、「兵庫・神戸を生きた詩人を語る」シリーズの、足立巻一、綾見謙、中村隆、君本昌久、竹中郁に続く六回目である。

杉山平一は1914年福島県生まれ。翌年、神戸三菱機の技術者であった父の帰任で神戸に帰り、7歳の4月に神戸東須磨尋常小学校に入学している。戦前、雑誌「四季」を見たことから、詩を書きはじめ、三好達治、立原道造

中原中也らの詩からも影響を受けながら自らを鍛えあげていった詩人で、その点では「四季」派を作った詩人というより、「四季」派に育てられた、最後の詩人と言いたい。また彼は、松江高校時代に「暮しの手帖」編集長の花森安治と知り合ったことで、若くして映画批評もするようになった。それ故、長谷川龍生の言葉で言えば「移動と転換」とか、小野十三郎のいうダブルイメージ、またシヨットからシヨットの転換など、映画の手法を取り入れ

*カラー詩画作品はホームページでご覧下さい。



た得難い詩人とも言える。

彼は詩集「夜学生」「木の間がくれ」「声を限りに」「ぜびゆるす」「青をめざして」など、多くの詩集を刊行。そのなかの「青をめざして」に収録されている「町」という作品を取り上げた。阪神・淡路大震災をテーマにしたものだが、しっかりと内部をくぐらせて、見たことを見たというだけではなく、どこか折りもあって、鋭く優しい作品である。あの日の、そしてそのあとの神戸を、水溜まりの水面に閉じ込めて、「風よ吹くな 人よ、石を投げるな」と歌うとき、ここには人間の手ではもはやどうしようもない、神、または天にまかせざるしかない、作者の深い悲しい思いが伝わってくる。

関西に住み続け、本協会でも長く顧問をされていた。いつも謙虚で物静か、その一方で方法的にはユニークで厳しい人だった。私たち後輩にも、大きな遺産を残した詩人だった。90分という短い時間だったが、杉山平一について深い検証がなされた意義深い講演だった。(報告：丸田礼子)

■文学紀行報告

◇2019・3・17兵庫区平野のまちを案内して

この度、平野という非常にローカルなまちを案内させていただいた。当日は、地下鉄大倉山駅に集合。あいにく雨が降り始めたが、みなさまあまり気にされず、大倉山公園の上へ。伊藤博文の銅像があった台座、神戸空襲の慰霊碑をまわる。途中、第1回メーデーの記念碑のことを大橋さんが説明された。

平野は歴史的にも文学的にも豊かなまちである。弥生時代の遺跡も各所で出土し、古墳があったことも確認されている。平安時代では、平清盛が福原遷都をし、「平家物語」「方丈記」などにも平野が登場する。室町時代の宝

篋印塔や江戸時代に建立された祥福寺では雲水が夏目漱石と文通したことは有名である。明治にはいと、田山花袋、国木田独步・収二、などが平野に住み、大正時代には田宮虎彦、五味康佑、また啄木の妹三浦光子が夫と共に孤院「愛隣館」を運営した跡地などを巡り、最後はカルメンで昼食となった。参加者13名。(報告：玉川侑香)



◇文学紀行エッセイ「平野散策」 関はるみ

春雨の少し肌寒い日に神戸平野界隈を詩友と巡る。案内は細い露地にも精通した方、自分の庭と同じ、子供の頃より遊んだとの事。そこには夏目漱石と雲水の交流のあった祥福寺、石川啄木や共同体「新しき村」を建設した武者小路実篤等、文人の住居跡があったり又史実とは違う事例も知った。その一つは奥平野浄水場の勝負が池の地がかの大楠公の敗死した地と聞き戸惑う。足利尊氏と戦い、湊川が終焉の地と認識していたので。その上数十年前に河内長野の観心寺を訪れた時、樹林の下に湊川から討死の後に届けられたと言う、荒縄がその人の頭部を波状に巻いた形のままの首塚を見ていたので。確かにそれぞれ縁のある地に違いないと思うが、世の中に名を馳せた人はいろいろな場所に名残りを留める事も珍しくはない。もう一つは坂道を登って行く途中、えっと立ち止まる。その道の左右にも道が続き四つ辻なのだが、更に前後斜めにも道が延び都合六本の道が交叉して、つまり六道の辻になる。京都東山の六道の辻は有名だが、かの小野篁が毎晩冥府に通ったという井戸はここにはないけれど、一瞬どの道に進むべきかと時代錯誤に苦笑する。それでも縁起もの、今は六本道と呼んでいるのだろう。他にも六道の辻は日本中にあるだろうからと納得する。折を見て今度は六地藏にも逢いに行く事としよう。楽しみが一つ加わる。それぞれが思いを胸に抱いてバス停に急ぐ。

■常任理事会まとめ

◇第5回常任理事会 1月26日、私学会館にて。常任理事11名出席*12月1日会報43号発行*ポエム&アートコレクション報告。展示参加者22名。講演参加者59名(うち会員22名)杉山平一氏の娘さんと息子さんも出席された*アンソロジー進行状況。発行は2月、参加者113名、400部発行*選挙管理委員会より役員選挙

結果報告。該当者に打診。役員人数は現状維持*関西詩人会との合同イベントについて。西宮あたりで7月くらいを予定。内容は代表が2月に合同検討会を行う*総会に向けて。5月6日(月・祝)私学会館にて。講師・田中荘介*来年度の詩のフェスタ、10月6日(日)講師については次回に検討。

◇第6回常任理事会 3月2日、私学会館にて。常任理事10名出席*会計報告。アンソロジー及び年会費未納者の件*読書会「藤富保男の詩について」報告。28名参加*ホームページは随時更新。行事の写真や会報のカラー原本など掲載*文学紀行。3月17日、平野周辺の文学歴史探訪。現在申込十四名*理事・監事・常任理事及び会長・副会長・事務局長・会計の検討。第23回総会にむけて。内容確認と、規約改正案について。会員へのお知らせは3月中旬以降に出欠葉書を送付*詩のフェスタ講師は池井昌樹氏*関西詩人会との交流会、8月17日(土)西宮市民会館にて。自作朗読、同人誌・参加者詩集の販売、終了後懇親会。

◇第7回常任理事会及び第38回理事会 4月22日私学会館にて。新会員も含め17名出席*新役員紹介と役割分担。会長・時里二郎、副会長・神田さよ、事務局長・山本眞弓、会計・玉川侑香。顧問・安水稔和、たかとう匡子。理事・梅村光明、季村敏夫、監事。渡辺信雄。常任理事役割分担、会報・和比古、議事録・尾崎美紀、入退会及び名簿・神田さよ、ホームページ・北の和博、アンソロジー・大橋愛由等、ポエム&アートコレクション・神尾和寿、北岡武司、読書会・丸田礼子、文学紀行・大西隆志、池井正樹ベント・神田さよ*総会にむけての報告書・年間行事など検討。自作詩朗読者八名。講演・田中荘介「詩と古代」。出席者39名予定*詩のフェスタ詳細検討。会の定例行事とは別に役割分担する。(報告・尾崎美紀)

■福井久子さん追悼文「海と光と花の詩人」

田中荘介

兵庫県現代詩協会の会長を務められた福井久子さんが、こ二月末に亡くなられた。一九二〇年、神戸生まれ九〇歳の生涯であった。

福井久子さんが生きた九〇年は、戦争から戦後の復興つまり、戦乱から価値転換に多くの人々が引き摺りまわされた乱世の時代である。戦争遂行に熱を上げる人々がいて、多くの人が家族を失い、家を失い、途方に暮れ、その末歴史の浅いアメリカから「民主主義」を押しつけられ、飢餓の中から立ち直り、生きのびてきた世代である。

福井さんの家は、老舗の商家(和洋家具店)で、神戸市生田区三宮町(今、三宮センター街)で、因みに神戸市で一番地価の高いところ)にあった。敗戦の年、女学校を出て、神戸女学院大学英文科を卒業し、関西学院大学(英米文学専攻)修士課程を修了。そして神戸山手女子短期大学や神戸大学教養学部などで教鞭をとった。詩人・喜志邦三氏に師事し、詩を学び、喜志氏主宰の「交代詩派」「再現」「灌木」などに作品を発表していた。のち「くろおべす」「たろうす」に入って詩を次々と発表するようになるが、第一詩集『海辺でみる夢』(人文書院)は、一九五六年、詩人二七歳だった。以後の詩集は第九詩集まで次のとおりである。

『果物とナイフ』(一九五六)、『街の中』(一九六四)、『海・鯨の通る路』(一九六九)、『鳥と着い時』(一九七五)、『仮面と微笑』(一九八一)、『異界からの客人』(一九九七)、『形象の海』(一九九九)、『飛天幻想』(二〇二〇) 選評集は芸風書院版(一九八三)と土曜美術社出版販売版(二〇〇四)の二冊があり、とくに後者の安水稔和さんの解説は同時代者として、ていねいでよい道案内。福井久子は海港都市神戸に生まれ、その視界は異国へとつながり、じじ

つ遠いイギリスの詩人への思いを馳せた。福井久子は詩人としてのみでなく、英文学研究者として（とくにエズラ・パウンド研究）業績を残し、著書として『E・パウンドとE.S. エリオットー 技法と神秘主義』（編集工房ア）がある。福井氏の背景にはエズラ・パウンドなど英詩人とのつながりが強くある。

第一詩集『海辺でみる夢』は、その後の福井詩の展開を予測させる萌芽が認められるが、何よりも海・光・花への強い関心が詩句や主題に表象されている。花の登場は、薔薇が目立つが、曼珠沙華、鶏頭、柘榴などというタイトルの詩の他、花そのものがテーマとなるものもある。次の詩は『果物とナイフ』に収められた「あなたは花」（全行）で「花」と「私」とは比喩として用いられている。

いわば／あなたは花である。／花からのぞく意志である。／言葉のように／もろい花びらに包まれ／透明な空中に／花をひろげる意識である。／ひそかに音をたてて茎を上る／大地の暗さは／花の重み／あなたの痛み。／であるとしても／何ものもその支えとはなりえないもの。／ただ／あなたの細い茎のみが／存在へのきざし。／であるとしても／その石段の熱さを／やわらげる風があるとすれば／その風こそ私である。

これは愛の詩と呼んでもいい。痛みをかかえて細い茎に支えられ、暗の中に立つ花の存在。その花を包みこみたいとする「風」なる私。私の好きな一篇。「愛について」という連作も別にあるが、光の詩人というのは、初期の詩篇からそれが言えるが、後の『形象の海』の中の次のような詩行にも光溢れてその様相がみられる。

やがて／空と海 みつめ みつめられ／かすかに破れていく力の拮抗／湧き出る不協和音には争いがたく／波はくずれ／光は泡となって天界に帰る（「仮象」後半）光は／初めも終わりもなく／境界も形もまたず／ゆらゆらと地表を満たす／あふれる光は／なにもかものみこん

で分離し浸透し／地に投影された映像をうる／影を生んで／闇を穿つ（「映像」冒頭）

福井詩はけつして難解というのではなく、絵で言えば具象と抽象の入り混った状態。観念（イデー）の生み出すその詩世界は、隠喩のキーがみつければ容易にほどけてくる。戦後詩の流れの中にあつて、豊かな色彩的な詩の相を帯びている。そしてどこか「くろおぺす」「たうろす」の詩人たちと共有するものが感じとれる。

「くろおぺす」「たうろす」の同人の多くは大学の教授たちで、英文学、仏文学、独文学その他深く学殖を蓄えた人たちであったから、合評会（私は「たうろす」29号―一九七三年から参加）は丁丁発止で、こわくもあり楽しくもありというものだった。多くの言葉が飛び交う中で、福井久子は多弁でなく、言葉で斬り込んでいた。

「ENTASIS」は、福井久子、山本美代子、田中荘介の同人3人による詩誌で、創刊は二〇〇九年、終刊は二〇一四年で一一号を重ねた。毎号の表紙は福井さんのお息女で画家の河合美和さんの油彩画が精巧な印刷で飾られて（少し）贅沢なものだった。合評会は神戸元町のレストラで昼食をとりながら、楽しい時間を過ごした。福井さんは、たいがい、エビフライ定食を注文した。今、福井久子という詩人を失い、なすすべもなく、たださみしさに堪えるのみ。

■寄稿

◇一九三〇年代モダニズム詩集のこと 季村敏夫

新しい世紀に入った頃からか、戦前の詩の同人誌に囲まれる暮らしが続いている。仕事部屋には関連資料が積み重なり、足の踏み場もない。『一九二〇年代モダニズム詩集―稲垣足穂と竹中郁周辺』このアンソロジーはすでに入稿している。そして今秋、『一九三〇年代モダニズム

詩集―矢向季子・隼橋登美子・冬澤弦』の上梓を目指している。まず『一九二〇年代モダニズム詩集』について。

きっかけは一五年前、関西学院大学神学部の受川三九郎の「真夏の日光と樹木」に出会った時の衝撃からだ。初めて知る名前、竹中郁にあらがっているのではないのか。西脇順三郎が、近代的ウィットに詩でいえばジャン・コクトーよりすぐれているとした竹中郁に素手で挑むアヴァンギャルドを感じとった。

受川三九郎の作品には、第一次世界大戦後に流入したダダやコンストラクションという言葉が戦闘宣言として刻印されている。作品へ向かう意識は尖り、意味の切断に力はそそがれ、シニフィアンは屹立する。詩を書き始めた当初の、第二次『明星』に寄稿した抒情は微塵もない。ダダやコンストラクション（構成主義）との出会いはどのようなものであったか。ある日突然消息を絶った。

竹中郁とつきあいのあった稲垣足穂の周辺に、エポック神戸支社（神戸市平野上祇園町）がある。『エポック』（創刊号一九二二年）は日本画家の玉村善之助（玉村豊男は八男）が主宰、ダダを虚数概念でとらえる野川隆が編集、神戸支社の高木春夫らは『ゲエ・ギムギガム・プルル・ギムゲム』（創刊一九二四年）という奇妙な名の雑誌に関わった。だが高木春夫も忽然と消息を断った。これはいかなる事象なのか。ダダや構成主義と激突、破砕したとみるべきである。

矢向季子、隼橋登美子、冬澤弦、読者にとって初めて知る詩人かもしれない。しかしこのラインにも、シュルリアリズムへの目覚め、コミュニストへの大弾圧、総力戦、同人誌の解体、モダニストらの戦争詩、日本文学報告会設立という歴史がある。藤田文江をこころの師とし、竹中郁に毒づいた矢向季子（一九一四―没年不詳）、本名なのか、どう読むのか。作品発表時の住所は林田区（現在の長田区）東尻池町二丁目一三八。発表の期間は昭和八年から昭和

十年五月、十九歳から二十一歳まで。寄稿した同人誌は『時計台』(札幌市)、『高架詩篇』(兵庫区上沢通)、『噩神』(編集発行 小林武雄、兵庫区門口町)、『素描』(筆者は未見)。昭和五年頃、『若草』(寶文館)を読み、高知市の今井嘉澄と知りあつて文通が始まり、瀧川富士夫の『聖草』に載る藤田文江の作品「群雀」や「廃人のノート」に衝撃を受けた。作品15篇、すべて原石である。次に姫路市上久長町の単橋登美子。本名は高橋富子なのか、わからない。生年不詳。二歳の長女を背負い毎日、まな板に向かった。夫の小林武雄は治安維持法違反により懲役二年の実刑を受け獄中、家を守らねばならなかった。身もつていたので、任意出頭の取り調べを受ける時間は苛酷であった。しかしいつも、凛とした姿勢で立ち向かった。ところが、差し入れ弁当をつくっていた夏、突如切迫流産、出血多量で死んだ。作品わずか八篇、詩人としてこれからという矢先の途絶。弁当は夫へ届けるためであった。小林武雄は編笠をかぶされ、縄で捕縛された姿で葬儀に現れ号泣、獄に戻ってから嗚咽の日々を強いられた。後に神戸詩人事件と呼ばれた一九四〇(昭和一五)年三月三日に起こった不当弾圧である。三人目は冬澤絃。戦前のモダニズム詩運動の最終ランナーである『新領土』(アオイ書房)に寄稿していた。住所は灘区高羽常磐通二、佐久間方、生没年経歴不詳。作品だけが残されている。神戸詩人協会や神戸詩人クラブの名簿にはない。足立巻一も君本昌久も触れていない。しかし『新領土』への関わりは亜騎保や広田好夫よりも早く、上田保訳のエリオットの『荒地』に目を通していたとおもわれる。港湾風景を切り取る作品にはコミンテルン舞踏会という現実から距離を置く視点が見られる。銀行の窓から神戸港を見下ろしていたのか、海岸通りの商社マンだったか、学生時代にコミュニズムに一瞬ふれたのか(マルクス・ボーイ)、召集された外地で戦死、このおもしろい消えない。歴史は繰り返される。版元は周防大島で蜜柑づくりで励みながら柳原一徳が営むみずのわ出版。グローバリズムにあらがう硬骨漢。造本は阪神大震災時

に長田区で被災した林哲夫である。

◇『驢馬』のことなど 季村敏夫

姫路の詩人映二(一九〇〇〜一九六〇)は忘れ去られた詩人である。本名織田重兵衛、詩集『海景の距離』(昭和九年四月、神戸詩人協会)。君本昌久と安水稔と編集『兵庫の詩人たち』に収録されている。神戸詩人協会は光本兼一(昭和九年に二四歳で急逝)が主宰。光本は謄写版の筆耕をしながら『神戸詩人』(創刊昭和三年七月)を編集、同時に詩集を出版。後に小林武雄が第四次として再編集(昭和一二年)、小林を含め十数名が治安維持法違反容疑で一斉検挙された神戸詩人事件勃発の前のことである。詩人映二の再評価の契機は台湾映画『日曜日の散歩者』から訪れた。映像に『神戸詩人』一九号が現れ、驚いた。洗練された竹中郁の『羅針』ではなく、なぜ『神戸詩人』なのかと。

映画は日本統治下の一九三〇年代の台南の詩人、風車詩社を描いている。彼らは日本語を通じてシュルリアリズムに目覚めたグループで、同人の揚熾昌ようしきしょうのプロフィールに「詩を作つては『椎の木』『神戸詩人』『詩学』などの日本の雑誌に発表した」とある。手元の『神戸詩人』を当たつたが、揚熾昌の作品は見当たらず、風車詩社への記述なかった。というより、宗主国としてアジアへの関心は稀薄であった。外地と内地を結びつけたのは光本兼一周辺の詩人映二という仮説をもとに調べてみた。

詩村(天王寺中学卒)は竹中郁(関西学院大学卒)らがアポリネール六年忌の追悼詩画展(大正一三年)を開催した三ノ宮神社境内で活動写真真弁士をしながら、上海の内山書店に出入りした田代健らアナキストと交友。詩村をたどると以下みえてきた。雑司ヶ谷の鳥羽茂編集の『詩学』九号(昭和一二年二月、ボン書店)に風車詩社の揚熾昌(へ

ンネーム水蔭萍)は作品「亜麻色の祭歌」、詩村は「青い村落」と「遠郷」を寄稿、また姫路市南畝町で『驢馬』(創刊は昭和十年。昭和一二年の七号の巻頭論稿は瀧口修造の「星の掌 故飯田操朗君の芸術」)を主宰、画家の飯田操朗や長谷川利行、また江戸川乱歩とも交友があり、ときにフランス語の詩の翻訳に挑むというジャンルを横断する奔放な人物であることがわかった。『詩学』誌上の作品を引いてみる。

亜麻色の祭歌—Les Amours Perdus 水蔭萍

花籠の果実。

青樹のスコールは夜空の星座をよんだ。

裂かれた風の匂ひ。

疾める花の日に尼僧はホン／＼と古弦を鳴らし、大洋の月はボヘミヤの綿帽子をかぶつた。

愛は祭堂に燃え、

尼僧は白蠟のやうに祭祠をよんだ。

傷だらけの歌の幻。堂房の壁画を見つめ、

冬ばらの陰影。静脈に顫へる血の華に、

尼僧の生誕日は柘榴の花と恋。

青い村落 詩人映二

逆さになる空

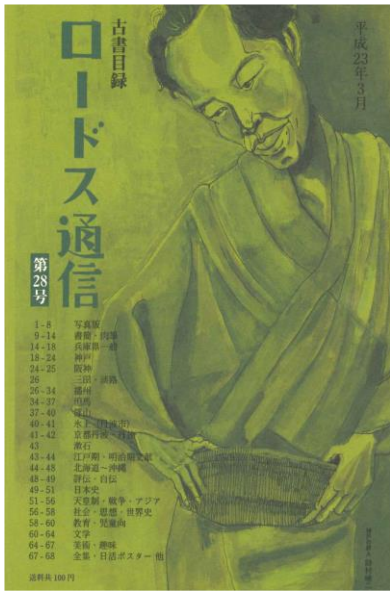
瞳にかなしい青の中に木の葉がそよいである
私を物語の部屋へそつと忍ばせやうために

樵夫が山を降りて来る朝のめざめ

陽の光を汲んで食卓を飾ってみる。
 もしも私ひとりなら
 窓硝子の小径に佇む花売娘を呼んでみやう

両者の詩の意識の違いは明らかである。詩村はシュルリアリズムから遠い。次に『驢馬』に言及する水蔭萍の読書ノート「秋窓雑筆」（台湾日日新報昭和十年十月三日）を読む機会に恵まれた。岩佐東一郎らの『文芸汎論』、恩地孝四郎の『書窓』などをとりあげ詩村の編集姿勢に触れている。『驢馬』は東シナ海に達していたのである。台湾日日新報社には西川満が勤め、妻の西川澄子が編集発行人の『媽祖』（第六冊、昭和十年九月）に水蔭萍と詩村映二のほかに堀口大學や西脇順三郎らが西川満へ言及している。なお『神戸詩人』一七号の受贈誌に台湾日日新報が記されている。

敗戦後の詩村は山彦書房という古本屋を営む。最晩年は不遇、身内に見守られることなく死んだ。左の図版は石阪吾郎が描く詩村映二。大安榮晃編集『ロードス通信』の表紙。ロードス書房は二〇一三年夏に幕を閉じた。筆者は三宮サンパル二階の店の本をあれこれ手にした後、大安さんと珈琲店に行き古本談義をするのが楽しみであった。彼は故人だが、なつかしい。



■会員の詩集評

時里二郎

◇北岡武司『時のなかに』（春風社）。2018年10月刊。同じ年の5月にも『鳩は丸い目で』を刊行なさっている。

第五詩集にあたる。北岡さんの詩の魅力は、声に出して読んだ時に如実に現れる詩の内的リズム。「蒼い光を浴び／きえいるように／息をはきだしていた君／心をきめあるきだす／呼び戻す声にふりかえり／瞳をほそめまたしても／悲しみをはきだし／いのち果てるようにはきだし／きりつと前を向いて／あるきだす」（「ふりかえらず」部分）。声にして読むときのリズムと音の秘密については、前号でも指摘したので繰り返さないが、引用部分では、「き」音を核にした「カ行音」が詩の歩行のリズムを生み出している。しかし、それは決して技巧的に仕組まれたものではない。おのずと北岡さんには「歌」うことへの、深い信頼があるように思われる。時に反語的に見える表現も、生きることへの大きな肯定の生み出す肺活量の小さな反映にすぎない。もう一つ彼の詩の魅惑について言えば、どんな人生にも同期してしまう精神のしなやかさともいえるのだろうか。ある人生の本質を印象的な情景のなかに描ききって、読み手の心を動かさずにはおかない。

◇安水稔和『地名抄』（編集工房ノア）2018年11月刊。単独の詩集としては24冊目の詩集。あとがきに「地名とは。過去の痕跡、記憶の堆積。現在の意識、いのちの発語。未来の標識、予感の音叉。（略）」とある。地名を題にした百篇の詩編。知られるように、地名は、安水さんの詩集にはおなじみのテーマで、地名をタイトルにした詩集も『能登』『西馬音内』『異国間』など9冊に及ぶ。むろん菅江真澄の旅程をたどるライフワークから汲まれた言葉の容れ物と言ってもいい。それにしても「前後」「及位（のぞき）」「香深（かぶか）」など、つぶやくだけでその土地の地霊が揺すり起こされるような、濃密な言葉の時間が尾をひいている。「床前」という真澄の「遊覧記」

由来の地名の詩の全編を引く。「浮田過ぎ／卯の木過ぎ。／床前の小道／分け行けば。／草むらに／白い骨あまた。／雪の消え残ること／乱れ散る。／あなめ／あなめ。／あな／あなめ。／積み重なる髑髏の／目穴より生い出る。／尾花 女郎花／揺れ。／あなめ／あなめ。／あな／あなめ。」「あなめ」とは小野小町の髑髏の目から薄（すすき）が生えて「あなめあなめ」（あな、目痛し）と言ったと語注にある。詩人は、「遊覧記」の真澄になって、飢饉のために飢え死にしたしかばねのころがる床前の地を歩いている。あとがきの言葉のしめくりに「今しばらく生きたい、今しばらく書き続けたいと。（今も旅のなか）と唱えつつ。」とある。言葉をつむぐのではなく、言葉に身をゆだねてその先に見えてくる言葉の世界をしるしているかのようだ。

◇黒田ナオ『昼の夢 夜の国』（澤標）2018年11月刊。第二詩集。タイトルに「昼の夢・」とあるが、夢というフィルターをかけてしまうと、この詩集のおもしろさが弱められる。どうしても夢の向こう側にある「意味」つまり作者のこころの無意識を解読するような読み方になってしまうから。なにせ、イメージを縁取っている言葉に湿り気がなくて、イメージそれ自体が実におもしろい運動の仕方をしているのだから。例えば「夜へ行くバス」。「運転手は／黒牛／行き先表示が無いまま／地面からいつも五センチばかり／浮かんている／略／気がつく／大きなマスクをつけて／夕暮れのバス停に／立っていた／月が待っています／どこからか声が聞こえてきて／静かにバスがやって来る／ドアが開いて乗り込めば／乗客はマスクをつけた女ばかり／略／見送っているのは／大きな魚を抱えた男たち／横にならんで／声をそろえて／知らない歌を歌っていた／さようなら／さようなら／私は黒牛のバスに乗る／骨まで黒いバスに乗る」運転手が骨まで黒い黒牛であることや、乗客はマスクをつけた女ばかりであったり、見送る男たちがみな大きな

魚を抱えていることに、意味をさぐるうとしてはいけな
い。言葉が作者をつついて、知らず知らずに論理や意味や
条理で固められたわたしたちの世界のことを気づかせて
くれていると思えばいい。詩集全体をつつむ、この白昼の
明るさを思わせるかわいたイメージは捨てがたい。「PM
6・15」の夕暮れの駅のベンチのぼんやりや「キリン
島」や「木曜病」の不可思議なナンセンスの世界。言葉が
事物のすきまをすり抜け、意味の世界を爽やかに覆して
いく心地のよい騒動に読み手は身をゆだねるだけでいい。

◇江口節『篝火の森へ』（編集工房ノア）2019年1月
刊。副題に「生田薪能詩篇」とあるように、毎年9月に生
田神社で行われる薪能のプログラムに寄せた作品24篇
を集成したもの。能という、詞章と音楽と舞の芸術と、狂
言という、口語のリズムを生かした言葉と身体動作の芸
術と、その両方の古典演劇からうけた刺激を、現代詩の世
界に、実に生き生きと響かせている。演目の能や狂言の世
界にそのまま繋がってしまうことを避け、能・狂言と、時
代と世界を超えて（響き合う）ような現代の詩の試みを目
指している。そしてそのことは十分成功していると思う。
「人をにくむと／人は木になる／／若い頃／こんな詩を
書いた／木のまつすぐな剛直さ／容易に刃の入らない幹
の堅さに／／六条御息所／あなたの理知と位が／憎し
みを恥ずべき情念として封印した時／あなたの奥底で／一
本の木が育ち始めていた／／経験を積み／いささか思考
を巡らすようになって／理知や階層によっても／思い
通りにならぬもの／／人は／木となり／無数の木となり
／地上に深い森の闇をつくる／／かなしみは煮凝り／／くや
しきは棒杖になり／打てば打つほど 憎む己が手／恨め
ば恨むほど あばらがしめつけ／／はりめぐらしたにく
しみの枝から枝へ／小さなけものが渡っていく／梢を掠
める風は寒い／森の縁はどこだろう／杵（くら）い空の底
を穿（うが）ち 骨のように／木が立っている／／斧を入
れてくれと 立っている」。能の演目「葵上」に付けられ

た「木が立っている」の全編を引いた。背筋の通った思考
と、多彩な詩語を操る技巧とが、実にあざやかに、そして
豊かに相まって、ゆるぎない詩の世界を紡ぎあげている。
あとがきに「表現するとは、いのちの発露と言えようか。
ひとりの生からたくさんの生へつながろうとする、いの
ち本来のさびしさから発しているようにも思われる。」と
あるのをここで思い出してもよい。また、作品に、社会や
この時代に孕まれている危惧やおそれをひそませ、世相
に対する風刺や揶揄も忘れない。この社会や時代へのま
なざしは、詩の重要な領域でもあるのだから。江口さんの
長年の詩作を支えてきた言葉や世界観を、みずから確か
めているようなおもむきのある詩集でもあった。

◇中島友子『おくりもの』（編集工房ノア）2019年2
月刊。あとがきに「詩とは私にとって難しい、遠い遠い存
在でした。／ところが、私が四十一歳の時、77歳だった
母の何げないことばに、ふっと詩を感じ、（略）日常の中
に詩があるのだと気づきました。」とある。「私の食べ残し
たぐちやぐちやのカレーを／おいしそうに食べてくれた
こと／結婚式や法事があると食わずに／料理を持って帰
ってくれたこと／月一回 姫路へ行くことビスコを／買っ
てくれたこと だのに／子どものお菓子なんかいらな
いと言ってしまったこと／お父さんがさびしそうだっ
こと 思い出します／よくしてくれました。病気になる
時／私は何をしたらだろう 何も返せなくて／後悔ばか
りです／ 本当にごめんね／年月とともに感謝の思いが
強くなります／父のいない34回目父の日です。「父
の日」という作品の全編を引いた。評言などいらな
い。「読んでみて」と、多くの人に読んでもらいたいと思
わせる。読んだ人がうんうんとうなずく。勧めたほうもうん
うんとうなずく。共感と郷愁と。父親という、ほんとうは、
どこかかなしげな存在を、こうやって、子どもになっ
てみることで、作者の父ばかりでなく、読んだ人の数だ
けの父親がそこよみがえるのだ。これを詩の言葉の醍

醐味と言わずになんと云えばいいのか。「日常の中に詩が
ある。」中島さんは、神戸新聞の文芸欄に投稿を続けてい
らっしゃるのだが、この詩集には、短い詩でいいものがた
くさん詰まっている。その中から「親心」の1編。「丁寧
に新聞紙に包まれた／白菜をいただきました／抱きかか
えた白菜は／おくるみにくるまれた／赤子のようでした」。

◇佐藤勝太『夢がたり、昔がたり』（竹林館）2019年
3月刊。亡くなられた佐藤勝太の生前の詩集。ここ数年の
あいだに次々と詩集を上梓なさって、その旺盛な詩作ぶ
りに瞠目していた。この詩集は、身の回りの風景、忘れが
たい人の思い出、さらには戦時中、戦後を回想しての感慨、
社会への眼差しなど、章をたてて構成されているので、佐
藤さんのこれまで耕してこられた詩の世界を一望するこ
とができる。なかでも一番印象深かったのは最終章の「夢
語り、生命がたり」だ。「日々の仕事や生活の／苦しい現
実から離れる／ために人の心を癒す／ことばで語り歌っ
ておれば／いつか詩のような気持ち／優しいことばと
なっていた」。「独り言」の一節、佐藤さんの詩作の源泉を
のぞくような言葉だが、様々な日々の感慨を正直に、時に
ひょうひょうとしたユーモアもこめながら、あたかも息
をするように言葉にしていく。それが佐藤さんの詩だ。や
はり詩集の掉尾をかざる「遠い日の少年」が珠玉の一編と
言えるだろう。全文を引く。「歩いていくと／前は次々と
展げてくる／家並や樹木 花々が／新たな景色で挑発す
る／／向こうを望むと／輝く山巔
の麓で／遠い日の少年が／手を上
げている」。



■他団体の会報・詩誌

- (2018年12月～2019年5月)
- 山形県詩人会会報34号(高橋英司)
- すずかけ3月・4月・5月(兵庫県芸術文化協会)
- 福井県詩人懇話会報100号(渡辺本爾)
- 福岡県詩人会173号(脇川郁也)
- 日本現代詩人会報154号(山田隆明)
- 詩界通信86号(川中子義勝)
- 関西詩人協会93号(左子真由美)
- いちご通信大分県詩人連盟会報(K)
- 岐阜県詩人会12号(古賀大助)
- 埼玉詩人会報89号(北畑光男)
- 島根県詩人連合会報86号(川辺真)
- やまがた現代詩の流れ2018(やまがた文学祭実行委員会)
- 呼吸(現代京都詩話会)
- 現代詩2019(日本現代詩人会)

■会員の発行書

- (2018年11月～2019年5月)
- 安水稔和詩集『地名抄』編集工房ノア
- 江口節詩集『篝火の森へ』生田新能詩篇 編集工房ノア
- 黒田ナオ詩集『昼の夢 夜の国』 澤標
- 尾崎美紀 絵本『のどぼとけさん』ひさかたチャイルド
- 高木敏克 小説『港の構造』航跡社
- 中島友子詩集『おくりもの』編集工房ノア
- 佐藤勝太詩集『夢がたり、昔がたり』竹林館

■会員の詩誌

- (2018年11月～2019年5月)
- 鶴鶴11号(江口節)
- 鳥75号(なすこういち)
- 個人誌 鷲が城便り(足立勝蔵)
- アリゼ189号 190号(以倉紘平)
- ガネット87号(高階杞一)
- 個人誌 河口から5号(季村敏夫)
- 現代詩神戸264号(三宅武)
- 個人誌 EDGING42(寺田操)
- 別嬢108号(高橋夏男)
- ア・テンポ55号(玉井洋子)
- 時刻表5号(たかとう匡子)
- RYME/REI64(永井ますみ)
- 多島海35(江口節)
- Messier.53号(香山雅代)

■会員の動静

- *****
- 時里二郎 ダブル受賞!
- この度、年が明けて早々嬉しい速報が入った。詩集『名井島』(思潮社・平成30年刊)が1月に高見順賞、続いて2月に読売文学賞を受賞した。二つの大きな賞を同時期に受けたのは喜ばしい。静謐で豊かなイメージが展開され言葉に流れるリズムがあり、新しく詩境を開拓したのが高く評価された。

第49回高見順賞受賞『名井島』(思潮社)

第70回読売文学賞受賞『名井島』(思潮社)

北岡武司 北岡武司詩集「時のなかに」出版記念会

5月18日(於)香港香港

田村周平 住所変更 〒678-0239 赤穂市加里屋601-3

■詩賞について

- ◇第25回中原中也賞 2018年12月1日から2019年11月30日までに刊行された現代詩集 応募締切2019年12月8日 <http://www.city.yamaguchi.lg.jp/soshiki/23/19260.html>
- ◇第26回丸山薫賞 2018年4月1日から2019年3月31日までに刊行された現代詩集 応募締切2019年6月30日 事務局 ☎0532-51-2874
- ◇第21回小野十三郎賞2018年7月1日から2019年6月30日まで刊行された詩集および詩評論書 応募締切2019年7月10日 <http://www.osaka-bungaku.or.jp>

◇第30回富田碎花賞 2018年7月から2019年6月30日まで刊行された詩集 応募締切19年7月31日 問合せ ☎0797-38-2091

■退会・逝去

大谷隆久、北山幸子、宮川守、福井久子(逝去)、芝崎修平、仲清人、吉田みち、住吉千代美、大賀二郎(逝去)、佐藤勝太(逝去)、由良佐知子(逝去)、内藤富美代

■新入会員をご紹介ください

兵庫県現代詩協会は詩に関し幅広い活動を行っています。詩を愛する方々の集いの場ですので、新入会員の入会を望みます。文学紀行や読書会などのイベントで交流を図っています。



■入会（50音順）

辻岡真紀子（本名：森本） 1960年西宮生 昨年、



「神戸新聞文芸」詩部門で思いがけず年間賞を賜り、そのご縁で選者の時里二郎先生に紹介を頂き、貴会に入会させて頂きました。貴会のこととは以前から「ひまようご現代詩集・アンソロジー」を読み、

よく存じておりま懇親会した。〒663-8204 西宮市高松町3-3-607 TEL 0798-20-5408

dziendobry0918@leto.eonet.ne.jp

奈木 文 1950年鳥取県生 詩を考えはじめて4年



です。兵庫県現代詩協会については、丁寧な取り組みをしていることと自由な雰囲気を感じていました。詩誌「軸」会員。〒639-1039 奈良県大和郡山市椎木町1-4-12 TEL 0743-56-8840 kjoji@ken.jp

法橋太郎 1963年大阪生 1980年、詩人となる

ことを決意する。1990年、本格的に現代詩を書き始める。1995年、個人詩誌『衍』を発行する。1996年、粕谷栄市氏によって江代充氏と高員弘也氏と同人誌『幽明』を2年間に亘って発行する。1998年、



詩集『山上の舟』により第九回歴程新鋭賞を河津聖恵氏と同時に受賞。2001年、詩集『魂の書 わが魂の不具』、2004年、詩集『阿呆教徒への詩』、2017年、詩集『永遠の塔』。所属：「メランジュ」、「ポワゾン」同人。

〒652-0005 神戸市兵庫区矢部町2-4-8-101 TEL 090-8210-6896 t5958210@icloud.com

吉田定一 1941年大阪府生 児童図書編集生活・



子どもの文化研究所を経て、絵本・童謡詩創作及び研究評論と大学講師へ。与田準一に師事。詩集に、『熊さん』『胸深くする時間』『記憶の中のピアニシモ』『You are here』、童謡集『よあけのこうま』、詩画集『かつてうれ

しいねこいちもんめ』『朝菜夕菜』、『児童文学詩人選集 吉田定一詩集』、『愛の詩集 わたしの胸の夕空に』、評論集『詩童謡の現在』（共編著）。絵本『ゆきやこんこん』『かばのさかだちあいうえお』他多数。詩集『海とオーボエ』で、野間児童文芸賞受賞。絵本『からすからすかんざぶろう』で、厚生省中央児童福祉審議会特別推薦。阿佐ヶ谷学園評議員。元東京学芸大学・白百合女子大学各講師。詩誌『伽羅』主宰。『PO』編集委員。日本現代詩人会会員・関西詩人協会運営委員。国際詩人協会会員。〒592-0014 高石市綾園1-9-1-810 TEL 072-264-8413 refranceyo@yahoo.co.jp

■会計より

今年度の会費を同封の振込用紙でお納めください。なるべく速やかにお願いします。年会費は4千円です。

振替口座00920・9・111243

口座名 兵庫県現代詩協会

前年度まで未納の方も速やかに納入をお願いいたします。なお、本年度から会計担当が野口から玉川に代わりました。どうぞよろしくお願い致します。（報告：玉川侑香）

■事務局および会報担当より

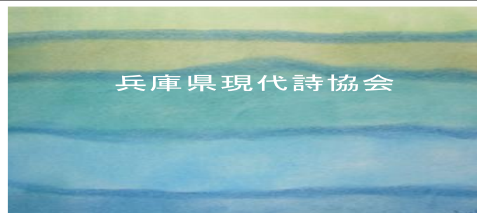
会員発行の著書、詩誌などの出版物は事務局にお送り下さい。詩に関するイベント等の案内、会員の動静、受賞、活動報告などの情報を事務局か会報編集担当にお送り下さる。

■ホームページへの投稿、情報提供

2018年5月に兵庫県現代詩協会のホームページがリニューアルされました。新URLは

<http://hyogopoetry.sakura.ne.jp/main/>です。

会員ならだれでも寄稿できます。エッセイ・評論等、未発表・既発表問いません。一掲載一万字未満程度・連載可。また会員が主催するイベント情報なども掲載可。照会先：HP担当理事北野まで [sorano hito.jp@yahoo.co.jp](mailto:soranohito.jp@yahoo.co.jp)



担当が変わりました！

兵庫県現代詩協会事務局《山本真弓》

〒651-0091 神戸市中央区若菜通6-4-15・2003

電話 TEL 078-241-3086

会計《玉川侑香》

〒652-0015 神戸市兵庫区下祇園町15-5

会報編集《和比古》

〒662-0084 西宮市樋之池町18-5

印刷所《遊文舎》

〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-1-7-3 1